

令和8年

2/28

SAT

13:30~

(受付開始: 13:00~)

阿南市情報文化センター
(コスモホール)

阿南市・那賀川町・羽ノ浦町合併20周年記念事業
シンポジウム

「阿波公方を語る」

当日配布資料

基調講演

「三好氏と

足利義維（義冬）・義栄父子」

天理大学人文学部歴史文化学学科教授 天野 忠幸 氏

パネルディスカッション

「徹底討論!

「阿波公方の実像にせまる」

天野 忠幸氏 (天理大学人文学部歴史文化学学科教授)
須藤 茂樹氏 (四国大学文学部日本文学学科教授)
根津 寿夫氏 (徳島市徳島城博物館前館長)
岩佐 義弘 (阿南市長)



義維の花押: 本能寺所蔵

主催: 阿南市 市民部 文化振興課

TEL 0884-22-1798

「阿波公方を語る」

那賀川町は阿波公方（平島公方）と呼ばれる足利將軍家一族が、戦国時代から約 270 年間にわたりくらしていた地であり、室町幕府 14 代將軍の義栄もこの地で生まれ育ちました。

近年、阿波における戦国期の調査研究が活発に行われており、これまでその実像が明確になっていなかった阿波公方についても新たな論説が生まれています。

そのようなことから、阿南市合併 20 周年を記念し、阿波公方研究等に見識をもつ専門家を県内外からお招きし、講演・パネルディスカッションを行い、まちの歴史文化に光をあてるとともに、まちづくりに活かす方法をかんがえます。

場 所 阿南市情報文化センター（コスモホール） 徳島県阿南市羽ノ浦町中庄上ナカレ 16-3

日 時 令和 8 年 2 月 2 8 日（土） 1 3 時 3 0 分～（受付開始：1 3 時 0 0 分）

基 調 講 演

『三好氏と足利義維（義冬）・義栄父子』

天理大学人文学部歴史文化学科教授 天野 忠幸 氏

パネルディスカッション

『徹底討論！—阿波公方の実像にせまる—』

【パネリスト】

天野 忠幸 氏（天理大学人文学部歴史文化学科教授）

須藤 茂樹 氏（四国大学文学部日本文学科教授）

根津 寿夫 氏（徳島市立徳島城博物館前館長） 《以上、五十音順》

岩佐 義弘（阿南市長）

コーディネーター：森脇 佳代子（阿南市文化振興課）

タイムスケジュール

1 3 : 0 0 受付開始

1 3 : 3 0 開会あいさつ（阿南市長 岩佐義弘）

一部（基調講演）

1 3 : 3 5 講演（60分間）

1 4 : 3 5（休憩 15分間）

二部（パネルディスカッション）

1 4 : 5 0 パネルディスカッション（90分間）

1 6 : 2 0 終了予定



昭和 51 年兵庫県生まれ。
大阪市立大学大学院文学研究科
後期博士課程修了。博士（文学）
現在、天理大学人文学部歴史文化
学科教授。
専門：日本中世史
主な研究テーマは、戦国時代の
権力、宗教、地域社会、三好氏、
松永氏。

天野 忠幸 氏

（天理大学人文学部歴史文化学科教授）

昭和 38 年東京都生まれ。
國學院大学大学院文学研究科博
士課程後期日本史学専攻単位取
得満期退学。
財信玄公宝物館学芸員、徳島城
博物館学芸員を経て、現在、四
国大学文学部日本文学科教授、
同大学院文学研究科研究科長。
専門：日本中近世史・博物館学



須藤 茂樹 氏

（四国大学文学部日本文学科教授）



昭和 39 年東京都生まれ。
明治大学大学院文学研究科（史
学専攻）修了。修士（文学）
・平成 2 年～徳島城博物館学芸員
・令和 4 年～市史編さん室長兼務
・平成 29～令和 7 年 徳島城博
物館館長。
現在、徳島城博物館主任指導員
専門：日本近世史（徳島藩）

根津 寿夫 氏

（徳島市立徳島城博物館前館長）

昭和 46 年徳島県生まれ。
広島大学理学部卒業。
・平成 24～27 年 JA 東とく
しま理事
・平成 27～令和 5 年 徳島県議
会議員（経済委員会委員長、県土整備委
員会委員長、文教厚生委員会委員長を歴任）
・令和 5 年～阿南市長
趣味：映画鑑賞、スキー



岩佐 義弘

（阿南市長）

登壇者

阿波公方

あわくぼう

とは …

阿波(徳島)に移り住んだ室町幕府足利将軍家のことです。ここでの「公方」とは「将軍」もしくは「将軍家」を意味します。

阿波公方は、室町時代後期から江戸時代後期まで約270年間、9代にわたって、阿南市那賀川町の平島に住んでいました。平島公方ともよばれます。

阿波公方のはじまり

応仁の乱後、足利将軍も、管領や大名たちの権力争いに翻弄され、混迷の渦中にありました。

こうした中、1534年に11代将軍足利^{よしずみ}義澄の子、^{よしふゆ}義冬(=^{よしつな}義維)が将軍継承争いに敗れ、^{ひらしま}平島(現阿南市那賀川町の南部地域)にやってきたことが阿波公方のはじまりです。



足利 義植



足利 義冬

初代阿波公方足利義冬(=義維)

^{よしつな}義維は、阿波守護細川家に養育されており、また阿波で客死した10代将軍^{よしたね}義植の養子でもありました。

^{よしつな}義維は将軍後継者として、一時は細川^{はるもと}晴元、三好^{みよしもとなが}元長(三好^{ながよし}長慶の父)とともに堺公方と呼ばれ、畿内を実効支配しました。しかし細川・三好の内部分裂がおこり、三好^{みよしもとなが}元長は自害。その後、^{よしつな}義維は阿波守護細川氏之の庇護のもと、^{うじゆき}那賀郡平島に移り住み、名を^{よしふゆ}義冬と改めます。



細川 晴元

足利 義維

『英雄三十六歌仙』より

14代将軍足利義栄



足利 義栄

その後、平島で生まれた^{よしつな}義維の子、^{よしひで}義栄は、三好氏に擁立され、摂津国^{とんだ}富田(現大阪府高槻市)で14代将軍となりました。

しかし織田信長の上洛により、その在位はわずか7ヶ月で幕を閉じます。

一方、徳島では、^{よしひで}義栄の弟、^{よしすけ}義助が^{よしつな}義維の跡をつぎ、その後9代阿波公方^{よしね}義根まで、歴代阿波公方は^{ひらしまやかた}平島館でくらししました。

江戸時代の阿波公方

江戸時代の阿波公方家は、藩主との関係の難しさもあり、3000貫から100石に所領を減じられたり、名字を足利から平島にかえさせられたりと受難が続きました。

政治的・経済的には厳しい立場が続きますが、学問の面で、8代^{よしのり}義宜、9代^{よしね}義根は、強い輝きを放ちました。



『棲龍閣詩集』(阿波公方・民俗資料館蔵)

^{しまづ かざん}義宜は京都の儒学者島津華山を招き、屋敷地内に住ませ、子弟の教育にあたらせます。^{よしね}義根の代には京阪の知識人との交流も活発になり、阿波公方家の人々は公方一門・華山門下として京阪の漢詩界で名を馳せるようになります。阿波公方の住む平島館は地元の学者・高僧・碩学が集い、徳島における漢文学の中心地のひとつとなりました。

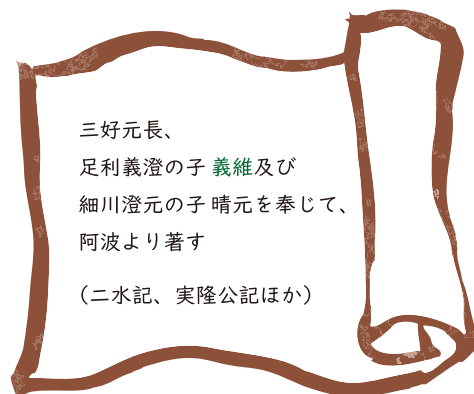
その後、藩主である蜂須賀氏との軋轢もあり、1805年、^{よしね}義根の代で阿南を去り京都に戻りましたが、現在も阿波公方がくらしした阿南の土地にはそのゆかりの史跡・伝承等が多く残されています。

阿波公方略年表 ①

西暦	和暦	できごと
1338	建武5年/延元3年	● 足利尊氏、征夷大将軍に就任。
1340	暦応3年/興國元年	足利尊氏、 ^{なかやまのしょう} 那賀山庄を天龍寺造営料として寄進。
1445	文安2年	「兵庫北関入船納帳」に平島湊の名が見える。
1466	文正元年	足利義植 ^{よしたね} (義材) ^{よしき} 、岐阜県(美濃)で誕生。
1467	応仁元年	● 応仁の乱、はじまる。
1490	延徳2年	★足利義植(義材) 10代将軍に就任。
1493	明応2年	● 明応の政変 ^{めいおう} (細川政元により、将軍が廃立される)
1494	明応3年	● 足利義澄(義高) 11代将軍に就任。
1507	永正4年	● 永正の錯乱 ^{えいしょう} (細川政元が暗殺される)
1508	永正5年	★足利義植(義材) 2回目の将軍就任。
1509	永正6年	足利義維 ^{よしつな} 、京都で誕生(異説あり)。
1511	永正8年	● 細川成之 ^{しげゆき} 、死去。
1520	永正17年	● 細川澄元 ^{すみもと} 、死去。
1521	大永元年	足利義植、細川高国 ^{たかくに} の専横を憤り、出奔。淡路へ。
同	大永元年	● 足利義晴 12代将軍に就任。
1523	大永3年	足利義植、徳島県鳴門市(撫養)にて死去。
1527	大永7年	● 桂川原の戦い(細川晴元・三好元長連合軍が細川高国と将軍 義晴を京都から追い出す)
同	大永7年	三好元長 ^{もとなが} 、義維を奉じて堺(大坂)に上陸。
同	大永7年	義維元服、左馬頭 ^{さまのかみ} に。
同	大永7年	12代将軍義晴、東寺に、義維の退治を祈祷させる。
1531	享禄4年	● 大物崩れ ^{だいもつくず} (細川晴元・三好元長連合軍が細川高国・浦上村宗連合軍を撃破、高国死去)
1532	享禄5年	三好元長、顕本寺(堺)で自刃、義維も自殺を図るが、晴元の配下に止められる。義維、畿内を去る。
1534	天文3年	★義維、平島(阿南市那賀川町)に移る(初代阿波公方)。
1538	天文7年	足利義栄 ^{よしひで} (義親) ^{よしちか} (義維長男/14代将軍)、平島(阿南市那賀川町)で誕生。
1541	天文10年	足利義助、誕生(義維次男/2代阿波公方)。
1546	天文15年	● 12代将軍義晴、将軍職を義輝(義藤)に譲る。足利義輝 13代将軍に就任。
1547	天文16年	義維、上洛を図り、堺に上陸。
1553	天文22年	● 勝瑞事件 ^{しょうずい} (阿波守護 細川氏之が三好実休に殺害される)
1564	永禄7年	● 三好長慶、死去。
1565	永禄8年	● 永禄の変 ^{えいろく} (13代将軍義輝が三好義継・松永久通らによって殺害される)
1566	永禄9年	足利義栄、父義維とともに越水城(兵庫県西宮市)へ、その後、普門寺(大阪府高槻市)へ。
1568	永禄11年	★足利義栄、普門寺にて将軍宣下、14代将軍に就任。
同	永禄11年	足利義栄、徳島県鳴門市(撫養)にて(異説:普門寺にて)死去。
1569	永禄12年	● 本圀寺の変 ^{ほんごくじ} (三好三人衆による将軍 足利義昭襲撃事件)
1573	天正元年	義維、平島公方館にて死去。 ★足利義助、2代阿波公方となる。 ● 室町幕府滅亡



福家清司「阿波国中世所領研究ノート」を参考に作成



最初、西光寺に仮寓し、のち平島公方館へ移る。

阿波公方略年表 ②

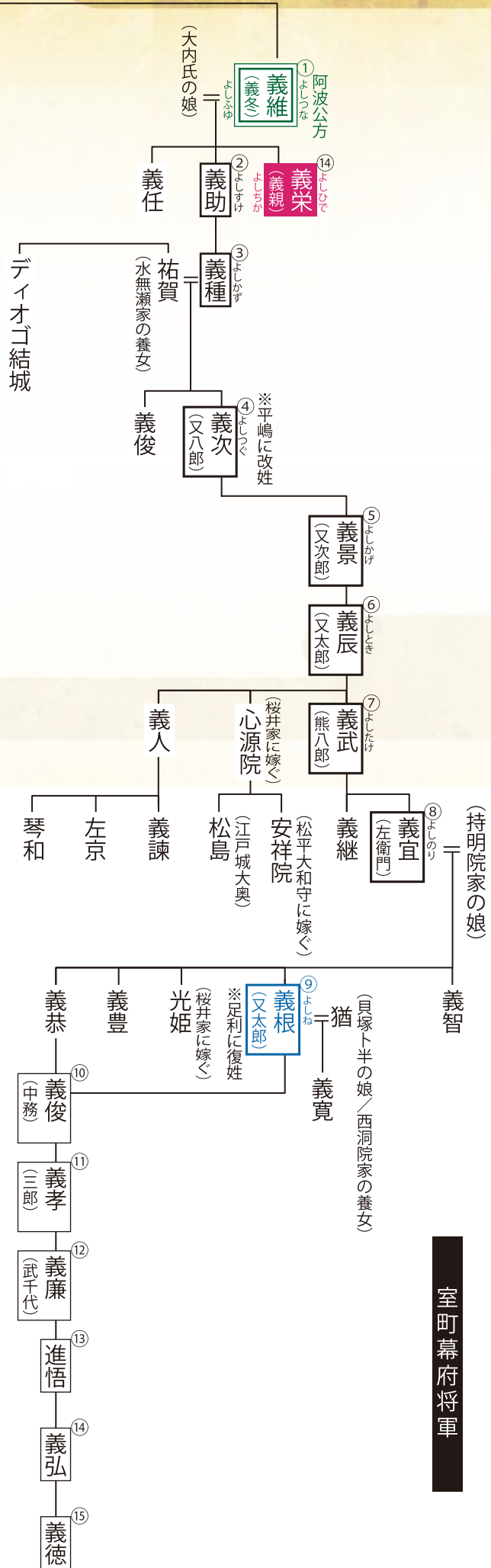
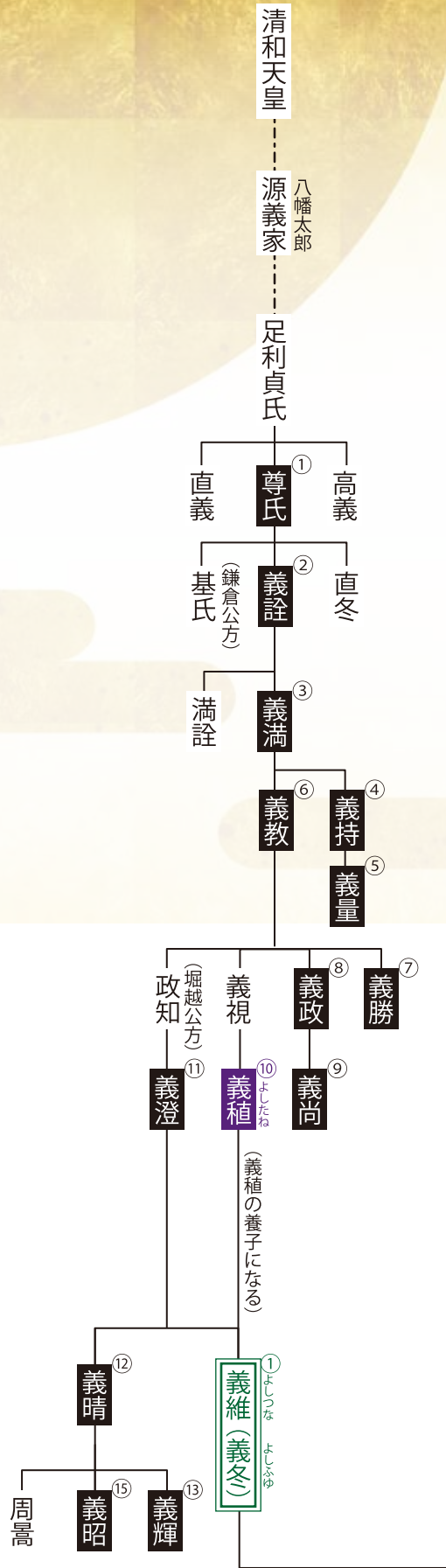
- 1575 天正3年 この頃から^{ちようそかべ}長宗我部氏の阿波侵攻開始。
- 1582 天正10年 ●————— **本能寺の変** ●————— ^{なかとみがわ}中富川の戦い（長宗我部氏、三好氏を破る）
- 1585 天正13年 ●————— **豊臣秀長四国征伐**、長宗我部氏は土佐へ撤退、^{はちすか いえまさ}蜂須賀家政が阿波（徳島）に入国。
- 1586 天正14年 義助、領地 16 カ村（平島 12 カ村と山分 4 カ村）を蜂須賀氏に取り上げられ、茶料 100 石の申し渡し。
- 1592 文禄元年 義助、平島で死去。★^{よしかず}足利義種、3代阿波公方となる。 ●————— **豊臣秀吉、朝鮮出兵開始**
- 1598 慶長3年 ●————— 豊臣秀吉、死去。
- 1600 慶長5年 ●————— **関ヶ原の戦い**、^{よししげ}蜂須賀至鎮、初代徳島藩主となる。
- 1603 慶長8年 ●————— **徳川家康、征夷大将軍に就任、江戸幕府を開く。**
- 1608 慶長13年 義次（のちの4代阿波公方）、平島姓と又八郎の名を与えられる。
- 1614 慶長19年 ●————— 大坂冬の陣
- 1615 元和元年 ●————— **大坂夏の陣（豊臣氏の滅亡）**
- 1630 寛永7年 義種、死去。★足利義次（平島又八郎）、4代阿波公方となる。
- 1636 寛永13年 デイオゴ結城、殉教。
- 1680 延宝8年 義次、死去。★足利義景（平島又次郎）、5代阿波公方となる。
- 1697 元禄10年 義景、死去。★^{よしとき}足利義辰（平島又太郎）、6代阿波公方となる。
- 1728 享保13年 義辰、死去。★足利義武（平島熊八郎 / 熊八）、7代阿波公方となる。
- 1754 宝暦4年 ●————— ^{しげよし}蜂須賀重喜、10代徳島藩主となる。以降、徳島藩で宝暦・明和の改革を断行する。
- 1761 宝暦11年 義武、死去。★^{よしのり}足利義宜（平島左衛門）、8代阿波公方となる。
- 1762 宝暦12年 義宜、京都より島津華山を招聘
- 1769 明和6年 ●————— ^{しげよし}蜂須賀重喜（10代徳島藩主）、江戸幕府から隠居を命じられる。
- 1778 安永7年 義宜、死去。★**足利義根（平島又太郎）、9代阿波公方となる。**
- 1786 天明6年 **義根**著 ^{せいらゆうかくしゅう}『棲龍閣詩集』刊行。
- 1794 寛政6年 島津華山、死去。
- 1805 文化2年 ★**義根、阿波平島を退去。**
- 1806 文化3年 平島公方館、小松島の地藏寺に移築。
- 1826 文政9年 **義根**、^{そうぜんじ}崇禅寺（京都市上京区 / 現在は廃寺）で死去。
- 1868 明治元年 ●————— **江戸を東京と改称、年号が明治に**
- 1871 明治4年 足利義俊、下山田村（京都府）で帰農。
- 1874 明治7年 足利義孝、^{しょうこくじ}相国寺寺内の普広院に寄寓。
- 1876 明治9年 足利義俊、死去。
- 1920 大正9年 足利義孝（三郎）、死去。
- 1921 大正10年 足利義廉（武千代）足利銀行の頭取を辞任し、同志社に転職。以降、同志社のために尽力。
- 1967 昭和42年 足利義廉（武千代）、死去。
- 1987 昭和62年 那賀川町立歴史民俗資料館（現在の阿南市立阿波公方・民俗資料館）、竣工
- 現在 令和8年 …以降、現在に至るまで阿波公方の血は受け継がれている…
- 未来

＋ デイオゴ結城は、3代阿波公方 義種の義兄（妻の兄）で、カトリック（イエズス会）の日本人宣教師として活躍した人物

三栗八幡神社馬場先より乗船→中島港を出航→紀州大崎浦→大坂→谷川→堺→大坂日本橋→淀→徒歩で鳥羽街道を上り等持院に入る→等持院方丈から塔頭功運院に遷居

7歳の足利義廉（足利武千代）、新島襄と出会う。

阿波公方(平島公方)略系図



室町幕府將軍
 阿波公方 (平島公方)
 京都足利家 (平島公方系統)

「三好氏と足利義維（義冬）・義栄父子」

天理大学人文学部歴史文化学科教授 天野 忠幸 氏

阿波公方の歴史とその意義

1. はじめに

三好氏は阿波の三好郡（徳島県三好市）の出身で、吉野川流域に勢力を拡大します。また、細川讃州家（阿波守護家）に仕え、阿波北西部の守護代になったり、側近として首都京都に赴いたりして、成長していきました。そして、戦国時代になると、足利將軍家が分裂し、細川一族を率いる細川京兆家（管領家）も二派に分かれるという状況になります。こうした混乱の中で、三好氏は当時「天下」と呼ばれた畿内へ進出しました。

「二つの將軍家」のうちの一つが、11代將軍足利義澄の子で、10代將軍足利義植の養嗣子となった足利義維に始まり、14代將軍になる義栄、弟の義助へと連なる「阿波公方」なのです。

畿内と阿波は、遠いようで近い関係です。阿波は、経済的には京都へ運ばれる米や藍、材木などの物資で賑わう環大阪湾地域の一員でした。政治的には、細川讃州家は細川一族の有力分家で、細川澄元、晴元、昭元と、その血脈が本家である細川京兆家の当主に受け継がれます。阿波が室町社会の政治や経済を支えていたのです。

2. 三好元長と「堺公方」義維

足利將軍家が分裂した原因は、明応の政変と呼ばれる事件でした。細川京兆家の政元が、10代將軍の足利義植を更迭したクーデターです。政元は11代將軍に義澄を擁立しましたが、地方の大名にはその強権的なやり方に反対し、義植に心を寄せる者も多くいました。

やがて、政元は家臣に暗殺されます。政元には実子がいなかったため、後継者争いが起こりました。畿内を基盤とする細川野州家出身の高国と、阿波を治める細川讃州家出身の澄元の戦いです。ここで、澄元を支えた武将が三好之長でした。

高国は政元の強権政治を改め、義植と手を組み、將軍に再任させます。逆に將軍から追われた義澄は、息子の足利義維を阿波に遣わし、細川澄元と同盟しました。しかし、義澄は近江で死去し、澄元と之長も敗れます。

高国の栄華が続くと思われましたが、やがて將軍義植と対立し、義維の兄弟の義晴を12代將軍としました。再び將軍の座を追われた義植は、細川澄元の子の晴元や三好之長の孫の元長を頼って、阿波に移ります。ここで足利義維は義植の養子となり、將軍への夢を受け継ぐことになるのです。

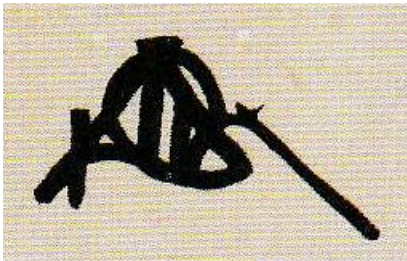
大永6年（1526）、時は来ました。足利義維・細川晴元・三好元長は挙兵します。翌年には堺に渡海し、義維は四条道場（引接寺）を御座所とします。これは養父の義植が宿泊し、將軍になった嘉例を意識したためです。

義維は「義賢」から「義維」に改名し、公家からは「四国若公」と呼ばれました。また、將軍義晴を近江に追い落とすと、「堺公方」「堺大樹」と呼ばれるようになります。つまり、堺の將軍相当者とみなされたのです。

堺公方義維が畿内を制圧しますが、地方の大名は將軍義晴に味方しました。こうした状況もあり、細川晴元は細川高国との戦いには熱心なものの、義晴との和睦を探る有様でした。享祿4年（1531）に三好元長が高国を討つと、義維を推戴する元長と晴元の対立は激化します。

双方の仲裁にあたっていた晴元の弟の細川氏之が阿波に帰ると、衝突は決定的になります。

享禄5年(天文元年、1532)、晴元は本願寺に援軍を依頼しました。一向一揆は三好元長のいる堺に殺到します。元長は法華宗の顕本寺に立て籠もりました。この時、義維は元長を見捨てることなく、駆け付けました。元長が力尽き切腹したのに続き、義維も自害しようとしたところ、晴元の兵に捕らえられました。義維は後に顕本寺の本山である本能寺へ、顕本寺で戦ってくれた僧侶の忠節に謝しているの、元長や堺の法華宗僧侶とは篤い信頼関係があったことがうかがえます。義維はすぐに堺を脱出し、阿波へ退去しました。



(義維の花押：
本能寺所蔵)

3. 三好長慶と「四国室町殿」義維

堺で敗れたものの、三好氏や足利義維は忘れられた存在ではありませんでした。

三好元長の子の長慶は、天文2年(1533)には軍勢を連れて、細川晴元の家臣として畿内へ出陣し、父の仇を討つ機会を待ちます。義維も天文8年(1539)に失脚した摂関家の九条植通を、阿波で保護するなど、影響力を持っていました。義維の家臣の畠山維広も畿内に赴き、渡海のための調略にあたっています。

やがて畿内では、細川高国の名跡を継いだ細川氏綱の勢力がさかんになります。晴元を助けるのは、弟の細川氏之や三好長慶・三好実休・安宅冬康・十河一存兄弟だけで苦戦していました。天文16年(1547)、「四国室町殿」と呼ばれた義維は、畿内に渡海し、政局の鍵になると、本願寺証如に支援を求めます。九条植通もその手助けをしました。植通の義兄の二条尹房が、義維と細川氏之に姉妹を嫁がせていた大内義隆を頼って山口にいることから、義維は彼らの力を結集して上洛しようと

画策していたのでしょう。しかし、本願寺証如は動かず、細川氏之に説得され、阿波へ帰りました。

天文18年(1549)、畿内の情勢は一変します。三好長慶が挙兵し、13代将軍義輝や細川晴元を京都より追い落としました。天文20年(1551)には、義輝による長慶暗殺未遂事件が起きています。こうした混乱の中、義維も上洛に向け、本願寺にさぐりをいれています。

長慶と義輝は戦争と和睦を繰り返しましたが、義輝の違約が決定的となった天文22年(1553)に義輝を近江に追放しました。この時、長慶は義維に上洛を促しています。ただ、阿波では三好実休が細川氏之を殺害する勝瑞事件が起き、混乱していました。義維も長慶の意図がわからなかったようで、上洛に応じませんでした。

4. 三好兄弟と義維・義栄親子

三好長慶が足利將軍家の者を誰も擁立せず、首都を支配するという、戦国時代でも極めて異例な状況が続いていました。そうしたところ、天文24年(弘治元年、1555)に、足利義維の息子の義栄が、阿波を治める三好実休の同意を得て、長慶に上洛の支援を求めます。

これを受けてか、三好氏・六角氏・畠山氏の間でさかんに交渉が行われました。畠山氏は将軍義輝に近い六角氏に、義栄上洛の動きはないと告げ、三好氏も六角氏へ、六角氏の望み通りにしたと回答していますので、義栄の上洛の話は立ち消えとなったようです。畠山氏や六角氏は、20年前の堺公方義維と将軍義晴の戦いで、畿内が大混乱に陥ったのを警戒していたのです。

畠山氏や六角氏は、長慶と将軍義輝がいずれ和睦するだろうと思っていたのでしょう。しかし、長慶は和睦ではなく、足利將軍家に代わって三好家が「京都静謐」、すなわち首都京都の平和維持や安全保障に尽力し、天皇や京都の住民を守る姿勢を示しました。

長慶は後奈良天皇の住む禁裏を修理するなど信頼関係を構築する一方、将軍の御所を下げ渡し、足利義輝の居場所は京都にはもうないことを示します。また明の皇帝からの使者にも、日本国王である義輝に代わって対応し、その誠実な人柄が高く評価されました。

一方、足利義維・義栄親子は上洛できませんでしたが、三好実休には丁重に遇されたようです。弘治2年(1556)に堺の豪商で茶人の天王寺屋津田宗達が、阿波に下向し、実休や義維の家臣の畠山維広と茶湯を催しています。実休は細川氏之を討ちましたが、その子の真之を庇護するだけでなく、「四国室町殿」という貴種を擁することで、阿波支配の正当性を確保しようとしたのでしょう。

長慶はその後、正親町天皇と共に弘治から永禄への改元を行います。しかし、幕府の存続を望む地方の大名の反発を買い、将軍義輝と和睦しました。

5. 篠原長房と「阿州公方」義栄

三好長慶が永禄7年(1564)に死去すると、十河一存の長男が後継者となりました。三好義継です。義継は永禄8年(1565)に将軍義輝を討つ、いわゆる永禄の変を起こしました。

公家は足利義栄が上洛するのではないかと考えましたが、京都ではそのような噂ありませんでした。実際に、足利義維・義栄親子が畿内に渡海したのは1年4か月後のことです。義継が義栄を将軍にする気があったとも考えられません。義継は自分自身が足利将軍家にとって代わり、将軍になろうと考えていました。

しかし、和泉や讃岐を治める十河氏から三好氏の本家を継いだ三好義継は、家臣団をまとめきれなくなり、とうとう、三好長逸・三好宗渭・石成友通からなる三好三人衆と、松永久秀・久通親子に分裂してしまいます。

このような混乱を治めるため、四国東部を治める三好実休の子の長治が動き始めます。永禄9年(1566)、長治の宿老である篠原長房が畿内に出陣し、三好三人衆に味方したのです。長房に続いて、足利義維やその子の義栄・義助兄弟も渡海しました。

畿内の人々より「阿州公方」と呼ばれた足利義栄は、伊予の河野氏や海賊の来島村上氏に支援を求めるなど、後顧の憂いがないように戦略を練っていました。

この時、足利義栄を擁立しようとしていたのは、篠原長房です。三好長治が四国を治めるため、分国法の「新加制式」を制定した名将です。

畿内で活躍した三好長慶や三好義継と異なり、四国を本拠とする三好実休・長治親子や篠原長房が、足利義維・義栄親子を擁した理由ですが、義維は三好氏や阿波の人々を頼って落ち延びてきた貴種であり、頼られた以上は、それに応えることこそが武士の本懐だったのでしょう。また、長慶と将軍義輝のように、幕府や中央政権のあり方、国家の本質的な問題をめぐって、対決したことがなかったこともあるでしょう。



(義栄の花押：神奈川大学日本常民文化研究所所蔵)

6. 「富田武家」義栄の将軍就任

足利義栄は、永禄9年(1566)より朝廷への工作を開始し、富田(大阪府高槻市)の普門寺に入ります。朝廷も三好三人衆や篠原長房が畿内を平定し、足利義輝の弟の義昭が越前に退去したことから、将軍就任の前段階として慣例にのっとり、義栄に左馬頭任官を許しました。ここで名を「義親」から「義栄」に改名します。

永禄10年(1567)になり、義栄の将軍宣下に向けた準備が進みますが、三好義継が松永久秀・久通方、すなわち、足利義昭陣営に寝返るといふ大事件が起きました。

急遽、三好長治も阿波より渡海して、畿内の混乱を鎮める事態となります。義栄自身は、事実上の将軍として振る舞い、石清水八幡宮の社務職や禁裏の大工職について決裁し始めます。ただ、朝廷は義栄と義昭を天秤にかけ始めます。膠着した状況を打開するため、「富田武家」義栄は妹を皇太子の誠仁親王に進めるという奇策を申し出ました。こうした公武合体構想は前代未聞で、却下されましたが、義栄の執念が感じられます。

そして、義栄は永禄11年(1568)、ついに14代将軍に富田在住のまま、将軍となりました。父義維や篠原長房たちの夢が叶った瞬間です。

ところが同年には、義昭や信長が畿内へ進軍します。

義栄・三好三人衆・篠原長房らは、京都防衛の常道である瀬田（滋賀県大津市）も東山（京都市）の諸城も守っていません。当初から、信長と決戦をする気はなかったのです。理由は不明ですが、この頃、義栄は腫物を患っており、あえなく亡くなったためでしょう。そうした状況では、士気があがるはずありません。織田軍が強かったためではなく、篠原長房たちは、最初から他日を期すため、軍勢を温存する作戦だったのです。

義昭と信長は、三好政権の本拠地である芥川城（大阪府高槻市）と將軍義栄の御座所であった富田を焼き、新政権の樹立を宣言した後に、ようやく上洛しました。

7. 長宗我部氏・蜂須賀氏と「平島公方」義助

三好三人衆や篠原長房は永禄12年（1569）には京都に攻め込み、足利義昭や織田信長に衝撃を与えます。元亀元年（1570）には、本願寺や朝倉氏と同盟して、義昭・信長包囲網を作りました。元亀2年（1571）になると、三好義継や松永久秀が、義昭のもとを離れ、三人衆や長房と合流すると、三好氏は再び畿内から四国を勢力下に収め、備前にも出兵しています。

ただ、足利義維・義助親子の活動は不明です。將軍義栄の死により、影響力を失ってしまったようです。三好氏はもはや阿波公方を擁することなく、將軍義昭や信長を追い詰め、元亀4年（天正元年、1573）には、ついに義昭が信長を見限る事態となります。

ところが、対信長主戦派の三好義継や篠原長房に対して、三好長治・義堅兄弟が和睦を唱える状況となり、長房は討たれ、義継も信長に攻められ滅亡しました。將軍義昭も京都から紀伊へ没落します。そうした激動の年に、足利義維は死去しました。

戦争に疲弊した阿波では内紛が続き、天正4年（1576）には、三好長治が細川真之に滅ぼされます。翌年には、土佐の長宗我部元親が阿波へ侵攻しました。元親が足利義助に領地を安堵し、馬を献上したという書状の写しが残っており、阿波公方の権威を利用しようとしたと解釈されてきました。しかし、当時の書状のマナーではなく、江戸時代になって、創作されたものです。

足利義助の末裔が、四国をほぼ平定するほどの権勢を誇った長宗我部元親元親ですら、義助には敬意を払ったのだと、徳島藩主の蜂須賀氏に対して主張したかったのでしょうか。

天正13年（1585）、関白秀吉は苦勞を共にした蜂須賀正勝の子の家政に、阿波を与えました。家政は義助の領地を没収し、わずか100石の茶料を平島（阿南市）で与えたのみでした。秀吉は毛利氏が擁立する將軍義昭と戦ってきました。当時はまだ義昭が現職の將軍であったことから、家政も義助を警戒していたのでしょうか。

慶長13年（1608）になると、蜂須賀家政の子の至鎮は、足利義助の孫の義次が足利名字を名乗ることを禁じたため、義次は平島を名乗ることにします。既に徳川家康が秀忠に將軍を譲与していましたが、お膝元の関東では鎌倉公方の末裔も、足利名字を名乗ることが許されず、地名の喜連川を名字としました。前の將軍家である足利を名乗ることが憚られる時勢となったのです。

8. おわりに — 「平島源公」江戸を生きる —

18世紀後半、平島公方は阿波の人々より崇められる存在になりました。庶民は「足利家」や「阿州足利家」とだけ書かれたり、「清和源氏之後」という朱印が捺されたりしただけの守り札を、マムシ除けの札として競って求めたのです。蜂須賀氏はたびたび、これを禁止しました。藩政改革が失敗し、一揆が続発した時期で、平島公方が蜂須賀氏に対する批判の受け皿となることを恐れたのです。

こうした貴種への呪術的信仰は、関東でもありました。上野の旗本の新田岩松氏は、養蚕農家の求めに応じ、ネズミ除けとして猫絵を描きました。新田岩松氏の祖先も、平島公方と同じく足利氏でした。

そうした中、足利義根は公家や文人と積極的に交流し、「足利源君」や「平島源公」と称されます。義根は文化2年（1805）に京都に移り、ついに足利名字に復したのです。江戸社会の動揺の中で、阿波公方は復権したとも言えるでしょう。

阿波公方関係 MAP (広域 / 阿南市)

- ① 阿波公方・民俗資料館…かつての阿波公方の居館跡
- ② 公方の郷 なかがわ(道の駅)…ガイドンス施設
- ③～⑫…次ページの阿波公方関係MAP(狭域/那賀川町)へ
- ⑬ 七浦山…阿波公方の領地。九代義根が漢詩を詠む
- ⑭ 八椀寺…八代義宜の妻が神鏡を寄贈する
- ⑮ 吉祥寺…山門は公方館遺構の可能性、義根の扁額、阿波公方歴代の位牌
- ⑯ 桂国寺…島津華山が義根の弟たちと共に漢詩を詠む。賀島氏の香華寺
- ⑰ 西方山…九代義根が漢詩を詠む
- ⑱ 津乃峰山…九代義根が漢詩を詠む
- ⑲ 青島…九代義根が漢詩を詠む
- ⑳ 羽ノ浦…九代義根の娘が嫁ぐ
- ㉑ 海正八幡神社、㉒ 古津、㉓ 湊、㉔ 下福井城…橘湾の中世拠点？

※ 平島12か村(北中島/中島/原/西原/大京原/古津/三栗/赤池/苅屋/工地上福井/ほか1村)と山分4か村(吉井/楠根/和食/仁宇)は、初代阿波公方当時の公方の領地

【徳島県内/下図範囲外】

- (小松島市) 地藏寺…阿波公方退去後、公方館を移築したと伝わる
- (小松島市) 光善寺…安宅冬康の次男・宗忍の開基と伝わる
- (小松島市) 桂林寺…阿波守護・細川持常の菩提寺
- (小松島市) 金磯、日峰山…島津華山が漢詩を詠む
- (徳島市) 眉山荘…眉山山麓にあった公方の別荘。装束屋敷
- (徳島市) 丈六寺…阿波守護・細川成之・氏之(持隆)・真之の墓がある
- (徳島市) 徳島城…蜂須賀氏の居城
- (徳島市) 興源寺…蜂須賀家の菩提寺
- (徳島市) 中津峰如意輪寺…島津華山が中津峰に登り、如意輪寺を漢詩に詠む
- (藍住町) 勝瑞城館跡…阿波細川家・阿波三好家の本拠(居館跡・城跡)
- (鳴門市) 光勝院…義栄の甥・明岳が住職をつとめた
- (鳴門市) 撫養…義植、義栄が没した地と伝わる
- (阿波市) 日開谷口御番所…阿波公方家来・荒井門内が徳島藩士に転じ勤めた
- (那賀町) 那賀川上流…仁宇、鶯敷はもと公方領地。九代義根が那賀川水源探索に行き、桜谷、花瀬へ、那賀川上流の様子を記録、また景色を漢詩を詠む



阿波公方関係 MAP (狭域 / 那賀川町)

- ① 阿波公方・民俗資料館…かつての阿波公方の居館跡
- ② 公方の郷 ながかわ(道の駅)…ガイドンス施設
- ③ 那賀川図書館…阿波公方漢詩石碑
- ④ 西光寺…阿波公方歴代墓所
- ⑤ 信行寺…山門は公方館遺構の可能性
- ⑥ 照円寺…二代住職妻と五代住職の妻はそれぞれ阿波公方の娘と伝わる
- ⑦ 大久寺…今津城跡
- ⑧ 宝満寺…義根閲覧の絹本著色弘法大師像を所蔵
- ⑨ 萬願寺…義根の兄・義智奉納の灯籠
- ⑩ 三栗八幡神社…七代義武奉納の灯籠
- ⑪ 古津八幡神社…義冬(義維)奉納の灯籠
- ⑫ 須賀の庵…儒者・島津華山墓、忠臣・富山長左衛門墓



近年の主な阿波公方研究の進展

和暦	西暦	著者	論文名・論考名	収録・掲載誌	発行	概要
平成16	2004	本多 博之	「小寺家文書」について	『兵庫のしおり』第6号	兵庫県	はじめて義維（義冬）の御内書（小寺家文書）の可能性を指摘
平成18	2006	長谷川 賢二	阿波足利氏の守札	『朱』49号	伏見稲荷大社	阿波公方のマムシ除け札について
平成19	2007	根津 寿夫	蜂須賀家騒動 重喜の改革をめぐる君臣抗争	『新選 御家騒動 下』	新人物往来社	蜂須賀重喜の改革の全体像と其中的の平島公方（阿波公方）の立ち位置
平成20	2008	山田 康弘	十四代将軍義榮と「二神家文書」所収御内書について	『戦国史研究』第55号	吉川弘文館	はじめて義榮の御内書（二神家文書）の可能性を指摘
平成22	2010	金原 祐樹	荒井家文書に見る日開谷番所	『阿波学会紀要』第56号	徳島県立図書館	荒井家（平島家家臣荒川家）文書について
平成23～平成25	2011～2013	須藤 茂樹	「阿波国退去後の平島公方 断章」（1）～（6）	『四国大学紀要』『言語文化』	四国大学	阿波退去後の平島公方家の史料紹介
平成24	2012	木下 昌規	「堺公方」足利義維御内書について	『戦国史研究』第63号	吉川弘文館	2通目の御内書（武家書状集）から義維（義冬）の御内書を確定
平成24	2012	岡田 謙一	足利義維の御内書について	『古文書研究』第73号	吉川弘文館	2、3通目（本能寺文書）の御内書から義維（義冬）の御内書を確定
平成26	2014	木下 昌規	永禄の政変後の足利義榮と将軍直臣団 ほか	『戦国期足利将軍の権力構造』	岩田書院	義維、義榮それぞれの直臣団についてなど
平成30	2018	馬部 隆弘	足利義晴派対足利義維派のその後 ほか	『戦国期細川権力の研究』	吉川弘文館	阿波公方と細川・三好の関係を史実から再考、「堺公方」期の対立構図など
令和2	2020	小川 雄	江戸時代に生きた足利将軍の末裔	『戦国期足利将軍研究の最前線』	山川出版社	足利の子孫、平島（阿波公方）家、喜連川家などについて
令和2	2020	木下 昌規	宿命のライバル・足利義維 ほか	『足利義晴と畿内動乱』	戎光祥出版	義晴、義維（義冬）兄弟の対立、（義維をトップとする）堺政権の構造など
令和4	2022	天野 忠幸	阿波公方の成立と展開	『戦国期阿波国のいさ・信仰・都市』	戎光祥出版	阿波公方全体に関する包括的、かつ最新の研究成果をまとめた論考
令和4	2022	嶋中 佳輝	長宗我部氏・平島公方関係再考	『戦国史研究』第83号	吉川弘文館	長宗我部から阿波公方へ発給したとされる文書（写）の信憑性について
令和4	2022	天野 忠幸	三好長慶と足利義維・義榮親子	『堺と武将－三好一族の足跡－』	堺市博物館	2通目（土佐家文書写）、3通目（彦根藩諸士書上）の御内書から義榮の花押を確定
令和5	2023	木下 昌規	「堺幕府」と「室町幕府」	『日本歴史』第900号	吉川弘文館	義維（義冬）の「堺幕府」について詳細に検討
令和6	2024	嶋中 佳輝	宮内庁書陵部所蔵『久留米諸家古文書』所収「松田氏家蔵古文書」	『大阪の歴史』第96号	大阪市史編纂所/大阪市史料調査会	4通目の義維（義冬）の御内書（松田氏家蔵古文書）
令和7	2025	嶋中 佳輝	足利義維派幕臣と三好権力—松田守興（光致）の動向を中心に—	『戦国史研究』第89号	吉川弘文館	義維（義冬）派のその後の動向
令和7	2025	畑 尚子	大名家と折衝する松島 平島公方の内願 ほか	『大奥の権力者 松島—田沼意次と共に活躍した将軍の懐刀—』	ミネルヴァ書房	平島公方の従姉妹にあたる大奥 松島の詳細研究。阿波公方家との密なやりとり、阿波公方家のために尽力。

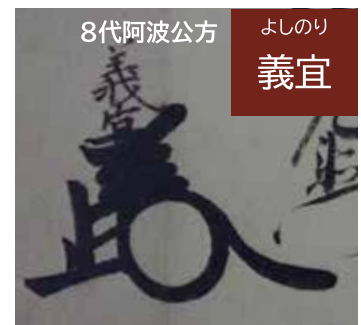
※「^{かおう}花押」とは…図案化されたサインのこと



国立公文書館所蔵朽木家古文書「足利義植御内書」より



「西光寺文書」より



「足利家文書」より

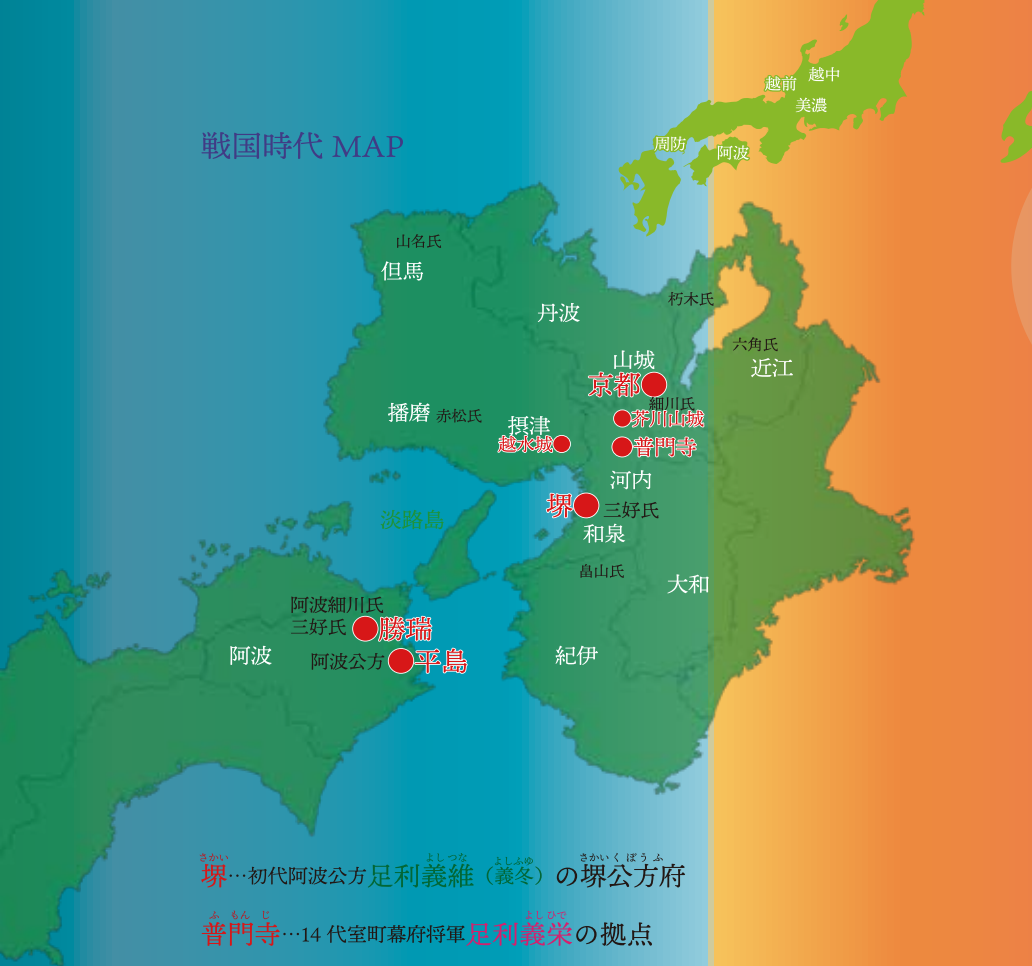
※「^{ごないしょ}御内書」とは…将軍が発給する直状形式の文書

基本文献・基礎資料・関連書籍など

和暦	西暦	著者	書籍名	発行	概要
昭和5	1930	田所眉東・天羽呑鯨 編	『今津村史略』	今津村	旧今津村（現 那賀川町北部）の村史
昭和12	1937	島田 麻寿吉 著	『阿波公方館址について』		阿波公方（平島公方）館跡についての考察
昭和60年	1985	武田 伴太郎 編	『村史平島』（大正12年、平島村役場刊の復刻）	那賀川町役場	旧平島村（現 那賀川町南部）の村史
昭和61年	1986	今谷 明・高橋 康夫 編	『室町幕府文書集成 奉行人奉書篇 上』	思文閣出版	奉行人花押写真、奉行人系図、奉行人一覧
昭和61年	1986	今谷 明・高橋 康夫 編	『室町幕府文書集成 奉行人奉書篇 下』	思文閣出版	足利義植奉行人奉書/足利義維奉行人奉書
昭和62年	1987	阿南市史編さん委員会 編	『阿南市史』第1巻	阿南市	
昭和63年	1988	笠谷 和比古 著	『主君「押込」の構造 一近世大名と家臣団一』	平凡社	蜂須賀重喜の藩政改革「宝暦の御建て直し・明和の改革」にかかる「平島一件」の経緯
平成9	1997	竹治 貞夫 著	『近世阿波漢学史の研究 続編』	風間書房	「第三章 平島公方の漢文学 島津華山と足利義根」江戸時代中期の阿波公方家の文芸
平成12	2000	若松 和二郎 著	『中世阿波細川氏考』		阿波細川氏を中心とした阿波・畿内の戦国史 2013年『阿波細川氏の研究』（戎光祥出版）として復刊
平成14	2002	那賀川町史編さん室 編	『那賀川町史』上巻	徳島県那賀郡那賀川町	近世 平島公方（生野勇）ほか
平成18	2006	竹治 貞夫	『訳注 榎龍閣詩集』	徳島県那賀川町	阿波公方9代義根の漢詩集。江戸時代中期の阿波公方家。
平成18	2006	那賀川町史編さん室 編	『平島公方史料集』（那賀川町史 史料編）	徳島県那賀郡那賀川町	中世/文化/系譜（須藤茂樹ほか）、近世（根津寿夫、生野勇、金原祐樹）
平成18	2006	今谷 明 著	『戦国期の室町幕府』（講談社学術文庫）	講談社	1975の復刊。「堺公方府の成立と崩壊」など。「堺幕府」呼称が議論を呼んだ。
平成18	2006	村井 道明 編著	『那賀川町の平島公方関係墓碑について 一付録 高橋赤水関係年譜一』		平島公方関係石造物/平島公方関係系図詳細検討
平成19	2007	三木 計男 著	『ディオゴ結城了雪と阿波公方』		3代公方の妻祐賀のキリシタン嫌疑、ディオゴ結城（3代公方の義兄）について
平成20	2008	村井 道明 編著	『平島公方関係金石文拓本史料集 一島津華山・足利義根・富本濟仲・高橋赤水一』		平島公方関係石造物
平成21	2009	三木 計男 著	『福者ディオゴ結城了雪を尋ねて』		ディオゴ結城・祐賀のキリシタン親族について、ディオゴ結城供養塔
平成28	2016	山田 康弘 著	『足利義植-戦国に生きた不屈の大將軍-』（中世武士選書33）	戎光祥出版	10代將軍義植の波瀾万丈な人生
平成29	2017	清水 克行 著、榎原 雅治・清水 克行 編集	『室町幕府將軍列伝』	戎光祥出版	義植（木下昌規）、義栄（天野忠幸）、義維（木下昌規）
平成30	2018	石井 伸夫・重見 高博 編	『三好一族と阿波の城館』（図説 日本の城郭シリーズ7）	戎光祥出版	平島館（石井伸夫）、勝瑞城館（重見高博）ほか
平成30	2018	日本史料研究会 監修、平野 明夫 編	『室町幕府全將軍・管領列伝』（星海社新書）	星海社	義植（西島太郎）、義維（岡田謙一）、義栄（須藤茂樹） 巻末に系図、経歴一覧、將軍・管領在任表有り
令和3	2021	谷口 雄太 著	『「武家の王」足利氏 戦国大名と足利的秩序』	吉川弘文館	「足利絶対親の形成」など
令和3	2021	天野 忠幸 著	『三好一族-戦国最初の「天下人」』	中央公論新社	三好一族を中心に、細川家、足利將軍家との関係
令和4	2022	石井 伸夫・重見 高博・長谷川賢二 編著	『戦国期阿波国のいくさ・信仰・都市』（戎光祥中世織豊期論叢6）	戎光祥出版	「阿波公方の成立と展開」（天野忠幸）、「阿波の戦国文化史-細川成之・三好実休を中心に」（須藤茂樹）
令和4	2022	天野 忠幸 編	『戦国武将列伝』7 畿内編【上】	戎光祥出版	阿波公方系統の奉行人 斎藤基速（佐藤稜介）、側近 畠山氏らについて ほか
令和5	2023	千葉 功 著	『南北朝正閏問題-歴史をめぐる明治末の政争一』	筑摩書房	戦前の足利氏評価の問題
令和5	2023	山田 康弘 著	『足利將軍たちの戦国乱世 一応仁の乱後、七代の奮闘一』	中央公論新社	「無力」「傀儡」というイメージを裏切る、將軍たちの戦いを活写
令和6	2024	木下 昌規、中西 裕樹 著	『足利將軍の合戦と城郭』（図説 日本の城郭シリーズ18）	戎光祥出版	堺、平島館、越水城、普門寺 ほか
令和7	2025	畑 尚子 著	『大奥の権力者 松島 一田沼意次と共に活躍した將軍の懐刀一』	ミネルヴァ書房	8代阿波公方義宜の従姉妹にあたる大奥の松島に関する詳細な研究。平島公方家の内願に奔走。

※阿波公方関係でおすすめの本をよく聞かれるので、担当者の独断と偏見で阿波公方（平島公方）について書かれている、もしくは平島に触れられている代表的な本を挙げてみました。他にもおすすめがあれば教えてください。

戦国時代 MAP

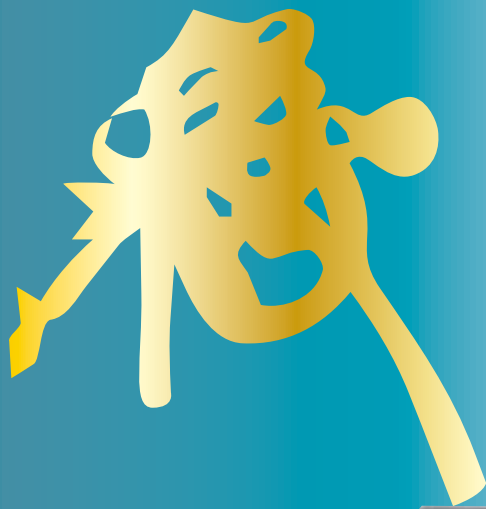


AWA KUBO

堺…初代阿波公方足利義維（義冬）の堺公方府

普門寺…14代室町幕府將軍足利義榮の拠点

勝瑞…阿波守護細川氏（阿波細川氏）・細川氏家臣三好氏の本拠



義榮の花押
：神奈川大学日本常民文化研究所蔵